

### III. 第三錦林小学校と連携した音楽科の授業実践研究報告

市川郁子

#### 1. はじめに

平成20年1月17日に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」を受け、学習指導要領が改訂され、その指導内容の改善事項として6点があげられた。「言語活動の充実」「理数教育の充実」「伝統文化に関わる教育の充実」「道徳教育の充実」「体験活動の充実」「小学校段階における外国語活動」である。特に「言語活動の充実」については、重要かつ喫緊の課題としてあげられ、各教科を貫く重要な改善の視点として示され、国語科で培った能力や言語活動を活用しながら、各教科の特性に応じてその充実を図ることが求められた。

指導内容の改善事項として「言語活動の充実」が第一にあげられたことを受け、学校現場は、すべての教科の中で「何か新しい言語の指導を入れなければならない」という受け止めをし、言語活動の目的の明確化と教員間の共通認識を十分に図らないまま、授業研究が進められているという状況は否定できないことである。

今回の改訂は前学習指導要領の理念である『生きる力』の育成の重要性を改めて強調したものである。「改訂」の趣旨を正しく理解し、「改訂」の真意を見極め直すと共に、各教科における改善事項への対応に、慎重に取り組んでいく必要があった。言語活動の充実に向けては、なぜ、今言語活動の充実を図らなければならないのか、その目的を明確に捉えることや、なぜ、国語科以外の教科においても取り組まなければならないのか、その最終の出口はどこにあるのか、といったことについて明らかにしておくことが、子どもたちに求められている「生きる力」をつけていくことにつながるのである。

そこで、「生きる力」をはぐくむうえで、特に大切な要素として示されている「思考力・判断力・表現力等」の育成が取り上げられた背景を捉えることにより、指導内容の改善事項の第一にあげられた「言語活動の充実」の必然性とあり方について音楽科の学習を中心に考えることにした。

## 2. 研究目的

音楽科のねらいや特性に応じた、確かな目的をもった言語活動とは何か、その内容や方法等について考察を進め、音楽科教育における「言語活動の充実」を図った授業を構想することにより、その指導の在り方に迫ることを目的とし、研究を進めることにした。

言語活動を重視することにより、授業改善を目指すために、以下の点を目的として研究を進めた。

- 思考力・判断力・表現力の育成につながる、音楽科のねらいや特性に応じた言語活動とはどのようなものなのかについて検証する。
- 明確な意図をもって言語活動を設定するための方法等について考察を進める。
- 音楽科の授業において、言語活動の充実をいかに図っていくか、その指導の在り方を検証する。

## 3. 研究の方法

題材「いろいろな音色をかんじとろう」（教育芸術社 第3学年・全8時間）における指導計画第1次に位置付けた「鑑賞領域」の2時間分の授業を京都市立第三錦林小学校の3年生の学級において実施した。その授業分析を行うことにより、鑑賞領域における言語活動のあり方について考察を試みた。

新学習指導要領において、言語活動について具体的に示されているのは鑑賞の(1)ウの事項においてである。中学年では「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表わすなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気付くこと。」と示されている。ウの事項で大事にしなければならないのは「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを」という部分である。「言葉で表わす」ということは、自分が思ったことや感じ取ったことを他者に伝えるコミュニケーションの手段であり、鑑賞の授業においては、感性を働かせながら音楽とかわり、子ども自らが思考、判断したことを言語で表現することにより音楽を知覚できる力を身に付けられるよう学習を展開する必要がある。具体的には、音楽を聴いて感じ取ったことを友達と交流し、一人一人の感じ方のよさに共感し

たり、感じ方の違いに気付いたりしながら感性をより豊かにしていくことや、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取る学習を充実させるためにどのように言語活動の場を設定していくのかを明らかにしていった。

#### 4. 実践の概要

今回は指導計画第1次の鑑賞領域における授業実践であり、意識した言語活動の1つは、楽曲の感じを捉えた後、楽曲の特徴や演奏のよさを生み出している「音楽を形づくっている要素」のかかわり合いについて気付いたことを友達と交流することである。言語で確かめ合ったことについて、音を伴って実感できるよう、確かめながら聴く活動を大事にした。そして、もう1つは、楽曲についての知識・理解の定着を図るために、1時間の学びを通して分かったことを記述することである。これらを意識して指導計画を作成した。

学習指導計画（全8時間）（但し、第2次・第3次については省略）

時	学習活動	留意点	具体的評価規準 (評価の方法)
第1次 ②	〈ねらい〉 金管楽器の音の特徴や音色の違いを感じ取って、想像豊かに聴く。 〈教 材〉 トランペットふきの休日・アレグロ		
1	○「トランペットふきの休日」を聴く。 ・曲を聴いて曲の感じを捉える。  ・なぜそう感じたのか、音楽の中から答えを見つける。  ・トランペットの音色を意識して聴く。	・初めて曲を聴いて感じたことを自分の言葉で話したり、書いたりする。 ・子どもたちの発言はどれも認め、取り上げるようにする。 ・「なぜそう感じたのか」そのわけを「音楽を形づくっている要素」に気付いて話せるように支援する。 ・楽器の音色、速度、リズム等が曲想を生み出していることに気付けるとよい。 ・曲の特徴は使われている楽器の音色や速度やリズムが関係しているということが理解できる	・思考、判断しながら音楽を聴き、楽曲のおもしろさを生み出しているものを見つけようとしている。 (鑑賞中の様子や発言の内容) ・楽器の音色、旋律等を感じ取って聴き、それらが楽曲のよさを生み出していることに気付いている。

2	<p>○「トランペット吹きの日」と「アレグロ」を比較鑑賞する。</p> <p>・「アレグロ」を聴き、「トランペット吹きの日」と比較して、曲の感じの違いを捉える。</p> <p>・なぜ曲の感じが違うのか、音楽の中から答えを見つける。</p> <p>・ホルンの音色を意識して聴く。</p> <p>・「トランペット吹きの日」と「アレグロ」を曲想の違いを感じながら聴く。</p>	<p>ようにする。</p> <p>・主な旋律の繰り返しについても聴き取った子どもの発表を全体に広めていくようにする。</p> <p>・「トランペット吹きの日」と比較した感想を求めるようにする。比較表現ができるようにする。</p> <p>・「音楽を形づくっている要素」に気付けるよう発問を工夫し、「なぜそう感じたのか」そのわけを話せるように支援する。</p> <p>音色、速度、リズム等が曲想を生み出していることに気付けるとよい。</p> <p>・2つの楽曲を比較鑑賞することにより、曲想の違いは「音楽を形づくっている要素」や「音楽の仕組み」によって生まれることに気付けるようにする。</p>	<p>(発言内容や感想文)</p> <p>・曲の感じの違いを生み出しているものを見つけようと思ふ、判断しながら聴いている。</p> <p>(鑑賞中の様子や発言の内容)</p> <p>・楽器の音色、旋律等が楽曲のよさを生み出していることを理解している。</p> <p>(発言内容や感想文)</p>
---	---	---	---

## 5. 研究成果

子どもたちが思考、判断しながら音楽と関わるために、また、友達の様々な感じ方に触れ、自己の感性を広げるために言語を活用した。言語活動は子どもたちが十分に音楽を感じ取ったり味わったりできるための手段であり、言語で確かめ合ったことを実感できるよう、必ず音や音楽を通して確かめるという活動が音楽科の授業では必要であった。

そして、1時間の学びを通して分かったことを言葉で表すことにより、子ども自身が音楽を知覚し、知識の定着を図ることができたと考える。

実践例の一部を示す。1時間目の学習の最後に、「トランペット吹きの日」について分かったことを書きまとめたワークシートである。

A児 楽曲の速度に一番関心をもった児童である。体で音楽を感じながら

聴いていた。主な旋律が追いかけるように次々と現れたこと、それを演奏しているトランペットが主役であること、楽曲の速度が曲想を生み出していることを捉えている。

ほくはとてモテンポがはやくて  
トランペットがメインの曲だ  
と思いました。せんりつが12回あり  
ました。テンポがはやくてに  
げてるかんじがしました。



B児 冒頭の「旋律がたくさんある曲」という表現は、主旋律が繰り返し演奏されていることを表現しており、主旋律のリズムが楽しいと感じている。自分は使われている楽器がトランペットだと気付かなかったが、意見交流を通して友だちの気付きに触れ、トランペットを意識できた。また、速度が速い楽曲は一般的に軽快であるが、B児は「テンポの速い曲は楽しい」と一般化して捉えている。

せんりつがたくさんある曲だ  
なと思いました。楽しい  
リズムだと思いました。使  
っていた楽器がトラン  
ペットだと分  
っていた人から聞いた  
のは、この曲はテン  
ポの早い曲は楽しい  
なと思いました。



提示した子どものワークシートの分析からも分かるように、自分が感じたことや判断したことなどを友達と交流するという言語活動を取り入れることにより、友達の気付きのよさや自分とは異なる思いや判断に触れることができ、楽曲の理解が深められることが分かった。コミュニケーションを図るための言語活動の有効性が確かめられたと考える。しかし、ワークシートの表記は十分であるとはいえないため、感じ取ったことや自分の思いを適切な表現を用いて伝

えていくためには、表記の仕方を学ぶためのモデル学習的な手法も必要である。

今回の授業実践を通して、言語活動の充実を図るために、次の点を意識して授業を進めていくことにより、授業改善が図れるということが検証できた。

- ①音楽を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表わすためには、根本において、子どもたち自身が「心に感じ取ったもの」を認識できるようにすること。
- ②「主観的な感想」と「客観的な気付き」を結び付ける手段として言語活動を取り入れることにより、子どもたちが音楽の概念を形成していけるようにすること。
- ③音楽的な語彙は、言葉と音楽が結びつくような音楽活動により、子どもたち自身が感じ取り、納得し、自ら獲得していけるようにすること。

人と人が音楽の感じ方を伝え合ったり、他者の感じ方に触れたり、共感したりするために言葉は重要な役割を果たす。豊かな話し合いを通して、個と集団の学習の質を高めていくことも言語の果たす大事な役割である。明確な目標をもった言語活動を鑑賞の授業に組み込むことにより、自分で感じ取り、思考し、判断したことを自分の言葉で伝える楽しさを体験した子どもたちは、生涯にわたって音楽に親しみ、より豊かな生活が送れると考える。

## 堀川小学校の教育実践と伝統

関 口 敏 美

### はじめに

富山市立堀川小学校は、2012年6月にユネスコスクールへの加盟が承認された。そこで教育活動全体の中で、持続発展教育(ESD)に取り組むため、今年度後期からの新研究主題「子どもの追究を拓く教育」にESDを位置づけ、「可能性に満ちた子どもたちが教育という営みを通して追究の主体として育つこと」は、「よりよい社会づくりにかかわろうとする心と態度を一人一人に育てるこ